

リスク・マネジメントの重要性－あらゆる事態想定を

ちばぎん総合研究所 取締役会長  
山崎 裕

今夏の各地で起きた災害を分析してみると、貴重な人命を救うことができたのでは、と思わせられる事案が多かったことが共通していた。神戸市灘区都賀川の増水事故、東京都豊島区の下水道増水事故、栃木県鹿沼市の一般道通行車両水没事故などが記憶に新しいが、いずれも集中豪雨が原因となり尊い人命が失われている。ここ数年変化している気象や自然災害への対応が全くできていなかったことが、関係者の「想定外だった」という言葉の中に無機質なものを感じたのは私だけだっただろうか。

リスク・マネジメントの側面から見ると、都賀川の増水事故の場合には「河況係数」（別表参照）という数字が参考となる。同係数は河川の最大流量を最小流量で割った値で、増水時には増水時の何倍の水が流れるかを示すものであるが、日本社会の水害に対する感受性が衰えているせいかもしれないとの指摘もされている。

増水時足首以下の水量しかなければ、増水時の水量は無限大に近いはずである。豪雨が山に降りそそいだとき、山から急斜面を下ってくる都賀川の鉄砲水をどうして予測できていなかったのか、痛ましさはもちろん、無念さがつもの。上流にセンサーを設置して、非常時には警報で知らせるシステムの早急な設置を期待している。

一方東京都は5人が犠牲となった後、一滴でも雨が降れば地下での作業を即刻中断させる方針を決め、請負業者には気象情報の自動配信システム導入を義務付けた。

また鹿沼市の水没事故の場合は、災害発生時に市民を守るべき警察や消防が想定外の通報件数でパニックに陥っていたという。被害にあった主婦が母親に携帯で「お母さん、さようなら」と告げたのが最期の言葉とは悲痛で嘆かわしい。

自然災害のスケールを想定外という言葉で侮ってはいけない。新しい情報収集手段（携帯電話・カーナビ・パソコン）の発達が人間の想像力や感受性を減衰させているのではないかとの推論もあるが、まさにそのとおりの現実には私たちは直面している。

それではどうしたらよいのだろうか。私たちが持つ五感をフルに稼働させて、あらゆる災害（リスク）に対する想像力や感受性を高めなければならない。そしてあらゆる災害（リスク）を想定範囲内とする努力が重要である。

私は企業等を訪問して「リスク・マネジメント」について講演をする機会があるが、最近では企業に限らず学校法人・各種協会・地方自治体などの関心は極めて高くなったと感じている。あらゆる組織の幹部の方々に、現場からの声が直接伝わる仕組みが徹底しつつあるのかも知れない。

大企業においては、2006年5月施行の会社法により内部統制の基本方針を取締役会で決議し、株主総会の招集通知等で対外的に宣言するようになり、以後着々と整備が進められている。その他の企業の意識も年々高揚してきている。家庭内でも、大事な家族の命を守るためにリスク管理は重要である。

私は今後もリスク管理に携わる人々にリスクに対する想像力や感受性を呼び戻すため警鐘を鳴らしていきたいと考えている。そして、安全で安心して暮らせる社会の大切さを訴えていきたい。

河況係数: 河川の最大流量を最小流量で割った値

河川名 ( )は測量地点	河況係数
テムズ川(ロンドン付近)	8
ライン川(バーゼル付近)	18
利根川(栗橋付近)	1,782
黒部川(宇奈月付近)	5,075
四万十川(具同付近)	8,920

高橋裕著「河川工学」から